

国際シンポジウム

東アジアにおける文化遺産の永続的な保存と活用 Sustainable Preservation and Utilization of Cultural Heritage in East Asia

日程：2011 年 10 月 12 日（水）～ 15 日（土）

場所：重慶文化遺産保護中心 中国

発表：

黄 克忠（中国文化遺産研究院）「中国古跡保護の当面するチャンスと挑戦」
沢田 正昭（国士舘大学 21世紀アジア学部）「日本世界遺産の保存と活用」
姜 大一（韓国伝統文化大学校）「韓国世界文化遺産の保護と利用」
袁 東山（重慶文化遺産保護中心）「合川魚釣城遺跡文化遺産保護の実践と探索」
李 午熹（韓国伝統文化大学校）「崇礼門の復元と伝統技術」
西浦 忠輝（国士舘大学イラク古代文化研究所）「長崎県、重要文化財・幸橋の保存と活用」
孫 華（北京大学）「揚子江三峡ダム三大文物保護事業についての評価」
岩崎 好規（サイバー大学）「アンコール地域の水資源開発の教訓」
魏 光徹（韓瑞大学校）「韓国考古遺跡の保存方法についての研究」
王 紅光（貴州省文物局）「村落文化遺産保護において貴州省の実践」
石崎 武志（東京文化財研究所）「遺跡保存に関わる水分移動解析」
王 建新（西北大学）「東西文化遺産保存理念と実践の異同」
傅 晶（中国建築設計院建築歴史研究所）「文化遺産保護計画若干問題についての探り」
朴 東熙（早稲田大学）「アンコール遺跡の保存と地域社会」
白 九江（重慶文化遺産保護中心）「都市景観視野下の文化遺産保護の一考察」
金 益柱（C & T Inc. / 鏡潭研究所）「三国時代木製矢筒の分析と保存」
梁 泌承（ソウル歴史博物館）「韓国陶磁器の修理と復元の歴史」
（発表順）

見学：

南宗鼓楼役所遺跡
合川釣魚城
白鶴梁古水文彫刻
奉節白帝城

近年では観光資源のひとつに世界遺産を位置づけているところが多い。アジア・日本研究センターでは、文化遺産を保存し、活用する技術的手法を具体的に議論できる国際シンポジウムを設定した。さらに、都市が肥大化する中で三峡ダム建設に伴う沿岸遺跡等文化遺産の保存と活用という大きな課題を背負ってきた中国・重慶市で開催できたことは非常に意義深い。

シンポジウムは重慶市所在の代表的な遺跡や発掘調査中の遺跡現場において、中国、韓国、日本の3ヶ国の文化財保存の専門家が一堂に会する会議となり、重慶市の問題というばかりでなく、広くアジア地域における文化遺産のあり方を検討する好機となった。研究発表では、重慶市における文化遺産保護の現状、中国遺跡保存の課題、日本世界遺産の保存と活用の現状、韓国世界文化遺産の保護と利用などに関する基調報告が行われ、次いで重慶文化財保護センターから主な遺跡の調査報告、そして各国における文化遺産の保存と活用に関する研究が計18件報告された。さらに、重慶市渝中区所在の「老鼓楼衛署遺跡」、「合川釣魚城遺跡」、奉節所在の「白帝城遺跡」、川渝所在の宋元戦争遺跡の「山城防御遺跡」などをつぶさに視察し、それらの保存と活用について討議をおこなった。これらの討議内容については、中国の文化財専門紙「中国文物報・保護科学週間」に要領よく報じられている。同シンポジウムの内容についても日本の毎日新聞、朝日新聞で会議の様子が報道された。

国際会議は、平成23年10月12～15日、主会場を重慶文化財保護センターに置いて開催した。参加者は、国士舘大学をはじめ、サイバー大学、早稲田大学、文化財研究所などの専門家が参加した。中国からはユネスコ北京事務所、重慶市文化遺産保護中心、中国地質大学、韓国からは国立韓国伝統文化学校、ソウル歴史博物館、韓瑞大学などの文化財保存専門家が参加した。なお、シンポジウムの報告書は平成24年6月に刊行される予定であり、これら研究成果をふまえての国際講演会を予定している。